愛知教育大学研究報告，52（人文・社会科学編），pp. 17～26, March, 2003

郁達夫『南遷』の背景

—館山・コルバン夫人・北条教会—

高橋みつる
Mitsuru TAKAHASHI

国語教育講座

はじめに

郁達夫の小説『南遷』*1は，彼の第一創作集『沈淪』に収められた一編である。物語は，東京で日本人女性の肉欲の犠牲とされた中国人留学生の伊人が，深く傷ついた心身を癒すために房州に行き，そこで，結核の療養に来ていたOという清純な少女と出会い，心を通わせるが，民族的偏見を持つ日本の男子学生の中傷攻撃に遭って，傷心の内に病を悪化させ，生死の境をさまように至る，というものである。

創作集『沈淪』に収録された三編の内，郁達夫の出世作となった『沈淪』は，日本の私小説との関係や彼の文学観・創作方法などを考える際にも大変重要な作品として，比較的多くの研究者によって論じられてきたが，『南遷』は，『沈淪』の延長線上に位置するものと捉えられてきたためか，あまり充分な考察がなされてきたとは言い難い。『南遷』に対する部分的な分析や評価には，たとえば，一人の留日学生が愛と同情を求める過程で，様々な挫折に遭遇し，その悲惨な運命を描くことによって，帝国主義の民族的圧力に対して，怒りの告発を示した，とするもの*2や，その主題は，『沈淪』と同様，現代人の苦悶，すなわち「性の苦悶」と「生の苦悶」を表現したものであり，先進的な新しい文化や人生の理想と遅れた社会の現実とが相矛盾する時代において，主人公の挫折感や余計者意識は，当時の知識人の生きる苦しさの芸術的表現であった，とみるもの*3があり，さらに，『南遷』に社会主義思想の影響が見られると指摘するもの*4もある。筆者は，このような従来の見解に異論を唱えるものではないし，また，小稿の目的は，『南遷』の主題や文学方法について検討しようとするものでもない。

『南遷』を仔細に読んでみると，その精緻で情趣に富んだ房州の情景描写は，そこに身を置き直接眼にした者でなければ到底表現し得ないものであろうと感じられるし，具体的で現実味を帯びた療養生活者の日常描写も，経験者であるか，経験者に取材した者でなければ知り得ないであろうと思わせるものがある。今回，日本聖公会関係者の協力を得て，当時の館山におけるキリスト教伝道の状況を調査した結果，小説に描かれた主人公たちの生活ぶりは，実際の状況を反映したものであることが判明した。また，一部の登場人物と，当時館山に在住中の実在の人物との関連性も確認できた。

そこで，小稿では，第3章以降の舞台となっている房州を中心に，小説の描写と実際の場所や人物を照合しながら，その事実関係を可能な限り明らかにしてゆきたい。それは，『南遷』執筆の背景を知る上で，必要で有効なことと考えるからである。あわせて，『南遷』におけるキリスト教の意味についても言及したいと思う。

1．房州（館山）

郁達夫が1920年2月下旬から3月にかけて房州で静養していたことは，確かなようであるが，彼が房州のどこで，どのような生活を送っていたかは，現在のところ明らかにされていない。郁達夫の年譜*5にも，「2月下旬，房州海岸に病を養う」と記されているのみで，伝記類には，房州静養について触れていないものさえ多くある。つまり，この間の郁達夫の事跡については，従来，ほとんど空白となっているのである。

郁達夫が房州において静養していたとする根拠は，おそらく『郁達夫詩詞抄』*6に収録された二首の詩「読唐詩偶成」「南船北馬，落落無成，自房州赴東京車上有感」と，各詩に付された「編者按」の記述であろうと思われる。

「読唐詩偶成」は，1920年2月24日作で，18，9歳の頃の英気も失われ，はるばる僻遠の地に来て，自然に親しみ浮き世を忘れる隠遁者の境地を詠っている。「編者按」は，この詩を郁達夫が房州に着いてまもなく書いたと述べた後，婚約者の孫荃に宛てた手紙の一節を引用している。

> 文（郁達夫の本名：筆者）はこの海岸に来て静養しております。東京から2百余里，距離は杭州と上海の間位です。日夜波の音が耳に喧しく，市井の騒々しさはありません。……今日友人を訪ねての帰り，『唐詩選三体詩合刻』を買いました。これを読んで昔のことを思い出し，詩興が湧き起こって，五言古詩一首を作りました。詩は出来の良いものではありませんが，私の最近の心身の状況がうかがえますので，ここに記しておきます。

文面から，郁達夫は少なくともこの手紙を書いた2月24日より前に当地に到着していたと考えられる。房

州静養の期日を２月下旬とするのは，ここから推測したものであろう。また，この地に訪ねるべき友人がいたことも，『南遷』の創作にあたって材料提供者がいた可能性をうかがわせるものといえよう。

もう一首の詩は，未来の妻への想いを詠ったもので，内容的には，房州静養とは直接の関わりはないが，その詩題に，房州に行っていたことがはっきりと述べられている。日本語に訳すと「あちこち旅をしたが，志を得ることもなく何ら成すところもない，房州から東京に赴く車中で思うところがあった」となろうか。1920年３月作とされるこの詩は，「編者按」によれば，３月16日の孫荃宛手紙の中に見られる。従って，房州からの帰京は，３月中と推定されるのである。

以下の考察は，郁達夫の房州における滞在地が，『南遷』の舞台であることを前提として進めるものである。

さて，小説の第３章は，主人公の伊人が房州の駅に降り立つところから始まる。

> ２月23日の午後２時半，房州半島の北条駅（北条火車站：原文）に東京発の４番目の汽車が到着した。この小さな田舎駅が俄ににぎやかになった。客はさほど多くなく，ぱらぱらと数人の乗客が改札口を出て行くと，駅はまた再びひっそりとなった。

「房州半島の北条駅」というのは，現在の館山駅にあたり，郁達夫が房州に滞在した当時は，「安房北条駅」というのが正式名称である。そもそも，明治42年に木更津線の延長を請願したことに始まり，大正２年以降「安房鉄道速成会」を結成して運動を続けた結果，大正７年８月の那古船形駅に続いて，翌1919年（大正８）５月24日に開通したのが「安房北条駅」である。郁達夫が訪れたのは，開通からわずか９ヶ月後であるから，彼が見た駅舎は，まだ真新しいものであったに違いない。

小説では，房州に着いた翌朝，２階の部屋の窓から外を遠望した伊人の眼に，「トタン屋根」の駅舎が映っている。資料*7によると，当時の駅舎は平屋であるが，屋根がトタン製であったかどうかは不明である。写真を見ると，確かに周りの商店の瓦屋根とは違っているようにも見える。

その後，この駅舎は，1923年（大正12）９月１日の関東大震災で倒壊した。駅舎として活用されたのは，竣工後４年余りの短い期間であったことになる。「安房北条駅」は，さらに，1946年（昭和21）３月１日に「館山駅」と改称して，現在に至っている。

ここで，館山・北条等の地名について整理しておきたい。小説では，主人公たちの生活圏は，「安房北条駅」の東方にある海辺の林間で，海岸からは館山の街が眺望できる。日曜日には，北条市内にある教会の礼拝に出かけている。

大正９年当時，現在の館山一帯は，４町６村で編成されており，北条町と館山町はその中の隣接した中心的な２つの町であった。小説中で「北条市内」とあるのは，北条町の市街（にぎやかな町中）という意味合いで使われているのであろう。その後，２度の町村合併を経て，昭和29年５月３日に現在の館山市となった*8。今日でも，館山市の中で，館山駅を中心とするメインストリートを擁する北条は，政治・文化・経済の中心地であり，館山町は旧城下町そして漁港として知られる。

伊人の房州に対する第一印象は，次のように表現されている。

> 四方の松林，幾筋かの雲が浮かんだ青空，広い空き地にゆらめく陽光，駅前の店でひっそりと勘定台の前にすわった数人の純朴な商人たち，それらの光景を見ると，自分が18世紀の田舎に迷い込んだかのような錯覚を覚えた。アレグザンダー・スミスの『村落の文章』の中の Dreamthorp が，あたかもこの東海の小島の東南の一角に移ってきたかのようであった。

房州の自然と町並みが，19世紀中頃のイギリスの随筆家であるアレグザンダー・スミスが描いた夢の村に比されている。第２章で，イギリス人宣教師が伊人に房州行きを勧めたのも，房州の風光が，伊人が好きなイギリスの田園風景に似ているからであった。「俗塵にまみれた東京で，失望傷心の極致に至った神経過敏の青年」にとって，房州の澄んだ空気とのどかな景色は，最適の癒しのロケーションだったのである。

伊人の病身を慰めた房州の自然の中でも，とりわけ，海岸は重要な役割を果たしている。

彼が初めて砂浜に足を踏み入れ，そこから海を眺めたのは，房州到着の翌朝であった。

> 藁葺き家の庭を通って，松の木の長い影を踏み，２，３歩出ると，もう砂浜であった。静かな海岸には人影もなく，暖かい日の光が降り注いでいた。海水が太陽の光を反射して，まるで微笑んでいるかのようであった。砂の上に幾筋か人の足跡がついていた。

伊人は，その日の昼にも，午後にも，夕方にも，夜にも，海岸を散歩している。そして，同じ海岸が，時間帯や気分によって，光線も色彩も波も異なる様相を呈してくるのである。たとえば，午後の海岸は次のように形容されている。

> 洋々たる大海原は，鏡のように平らで，日光が斜めに差して，光線が松の木の梢にさしかかり，所々に陰影を作り出していた。…（中略）…彼は午前の風景を肺病を病んだ純潔な処女にたとえ，午後の風景を成熟したあとの嫁いでいった豊満な婦人にたとえてみた。しかし，よく考えてみると，たとえがあまりにも俗っぽく感じられた。

心惹かれる少女Ｏと初めて言葉を交わし，二人きり

で散歩したのも，夕方のこの海岸であった。Oが口ずさむもの悲しいミニヨンの歌は，夕暮れの海辺の空気の中をゆらゆらと漂い消えていった。その夜，伊人は，Oと過ごしたひとときの記憶をたどるように，月光の下の砂浜をさまよい，二人の足跡をさがす。また，日本人学生Kのあからさまな非難の言葉を聞いて，その真意を確かめるため，Kの友人のBを誘って向かった先も，海岸であった。ここで，Bからも理解を得られず，伊人は，悲しみと孤独感にうちひしがれる。

要するに，海岸は，その刻々に変化する表情の入念な描写とともに，癒しの場，淡い恋を語る場，感傷を誘う場としての重要な機能を与えられているのである。

郁達夫の小説では，山や川，湖など秀逸な自然描写が多く登場するが，海岸の情景をこれほど克明に描いた作品はない。浙江省富陽県の富春江に臨む景勝地に生まれ育ち，杭州・上海・日本と移ったその後の遍歴を考えても，白砂青松の文字通りの海辺で過ごした経験は，この房州での静養生活以外にはなかったからであろう。

本章の最後に，当時の館山に関するいくつかの事物について，付記しておきたい。

まず，伊人が海岸から望む湾の向こうに，2つの小島，「鷹ノ島」と「沖ノ島」が浮かんで見えている。実は，「鷹ノ島」は，その後の関東大震災の地殻変動で隆起して，陸続きとなってしまい，これを利用した海軍が埋め立てを行って館山海軍航空隊を置いた。

次に，伊人とOは，夕暮れの西北の海上に，冠雪した富士山を眼にするが，これは，当時の写真によっても確認できる景観である。

作品の最後に，初めて，伊人の滞在していた場所の名前が出てくる。北条の八幡海岸である。現在の行政区分で言えば，八幡は，館山駅のある北条の北隣にある。北条・八幡を含めて，その一帯の海岸を現在では北条海岸と呼んでいるが，かつては，八幡海岸と呼んでいたらしい。

その八幡海岸から，重病の伊人を乗せた寝台車が向かったのが，北条病院である。北条病院は，関東大震災にも倒壊しなかった数少ない建造物の一つで，昭和49年に現在の鉄筋の病院が出来るまで使用されていた，天然スレート葺きの瀟洒な建物であった。建物こそ変わったが，今でも元の場所，館山駅前のメインストリートをまっすぐ東へ進み，突き当たった通りに，館山警察署・館山消防署と並んで建っている*9。

既に述べたように，館山は，関東大震災によって壊滅的な被害を受けた。『南遷』に描かれた「安房北条駅」の駅舎も，駅前の商店も，海に浮かんでいた「鷹ノ島」も，おそらくは郁達夫が眼にしたであろうその時から3年余り，『南遷』執筆時点からはわずか2年で，一瞬にして或いは姿を消し，或いはその姿を一変させてしまった。現在となっては，『南遷』は，一中国人作家が，図らずも関東大震災前の館山の様子を記録した，貴重な作品であるとも言えよう。

2．コルバン夫人

伊人が，転地療養先の房州で身を寄せたのは，C夫人の家であった。C夫人のプロフィールについて，小説ではどのように記述されているかを，まず見ておこう。

イギリス人宣教師が伊人にC夫人のことを話した時，次のように説明している。

> 「……私には房州に住んでいる女友達が一人いて，彼女もイギリス人です。夫が亡くなって，一人で海辺に住んでいます。彼女の家は大変広くて，海岸の林の中にあります。それに，彼女は熱心なキリスト教徒です。君がもし行くなら，紹介してあげますよ。彼女は中国人がとても好きなんです。というのは，彼女と彼女の夫は，以前中国で医者をしていたことがあるからです。」

イギリス人で敬虔なキリスト教徒であり，かつて夫とともに中国で医療活動に携わっていたことがあるが，夫は既に亡くなり，今は一人で房州の海岸の林間に建つ広大な家に住んでいる，というのが，イギリス人宣教師によって語られたC夫人の人物像である。さらに，伊人が初めてC夫人に対面したとき，「55，6歳の西洋婦人」と述べられている。

『南遷』の中では，C夫人はいわば脇役の一人に過ぎず，これまで特別意識して言及されることもなかった。筆者もまた，Cという人名の略称が意味を持つものとは考えていなかったのであるが，この度の調査によって，C夫人が，明治末から昭和にかけて房州の医療伝道*10に大きな足跡を残したコルバン夫人をモデルとしたものであることが判明した。以下，『房州に光を掲げた人々』*11の記述をもとに，コルバン夫人の略歴を記しておく。

ソフィア・エレン・コルバン（Sophia Ellen Colborne）は，1863年*12英国南ウエールズのスワンゼイで生まれた。学歴は不明であるが，絵画・音楽・語学の才能に恵まれていた。長じて，宣教師となる研修を受けた後，1888年，ロンドン伝道協会より派遣され，香港に赴任した。その香港で，医療伝道に従事していたイギリス人のコルバン医師と出会い，1894年結婚した。二人は広東付近の医療伝道に専心したが，コルバン医師が健康を害したため，広東の伝道を断念し，1898年函館に赴任，慈善病院を設立した。コルバン夫妻による医療伝道は一躍有名になり，診察を求める人々が毎朝行列を作るほどであったが，1905年の暮れ，コルバン医師が脳溢血による中風に罹ったため，房州北条の八幡海岸に転地した。この地でも，貧しい結核患者のための療養所を設け，医療伝道につとめる。1915年に

コルバン医師が亡くなった後も，コルバン夫人は療養所の充実と教会事業に一層尽力した。1923年関東大震災で療養所が倒壊した後，現在の南三原に移転し，1926年の失明後も伝道と幼児教育に力を注ぎ，1940年房州にて77年の生涯を閉じた。なお，コルバン夫人は，館山市外城山墓地に夫コルバン医師の墓に並んで葬られている。

小説中のC夫人の人物設定は，年齢を始めとして，当時北条の地に実在したコルバン夫人の経歴を，ほぼ忠実に反映していることがわかる。

再び，『南遷』の描写から，C夫人に関連する記述を拾っていく。C夫人の家は，館山駅から人力車で村道を30分ほど行った，八幡海岸の林間にあり，庭園を低い灌木に囲まれた，赤い板塀の2階建ての洋館である。一階には祈禱室があり，毎日午後3時から4時まで，療養中の学生を集めて祈禱の時間を持つ。聖書の一節を読み，賛美歌を歌って，お祈りをするのである。また，火曜日と金曜日には，ここで聖書研究会が開かれ，参会者全員で賛美歌を歌い聖書を輪読する。さらに，C夫人はたびたび伝道に出かけ，日曜日には北条市内の教会に礼拝に行く。

コルバン夫妻が，八幡海岸に尾沢氏の別荘（海幸苑裏）を買い求めて移住したのは，1909年（明治42）頃である。その家について，コルバン邸の隣家に住んでいた成瀬政雄は，「その土地の広さは，五百坪位でその周囲はやはり松林につながっていた。家屋は木造瓦葺の二階家で，まわりは柿の渋で塗ってあった。建坪は，附属家もふくめて，全体で百坪位であったと思う。階下の広間には暖炉があった。」[*13]と回想している。小説の「赤い板塀の2階建て」や伊人が最初に住んだ2階の部屋は，回想にあるコルバン邸を彷彿とさせるものである。

ところで，前章で，房州が清澄な空気とのどかな自然に恵まれた土地であることを述べたが，当時八幡海岸は美しい松林が続いていて，結核に悩む人々が新鮮な空気を求めて療養生活を送っていた[*14]。コルバン夫人は，先の略歴にも記したように，それら結核療養者のために「養生院」或いは「コルバンホーム」と呼ばれる療養所を建設した[*15]。西に松林と海を臨み，南向きで東西に長くて日当たりがよく，6部屋と，重症患者のための別棟が一室あった。コルバン夫人は，療養者に聖書を教え，栄養・安静・散歩など，規則正しい生活を指導し，栄養のある飲み物を調理し，薬を一人一人手渡したという[*16]。

『南遷』の中で，伊人は結核の兆候があることがそれとなく示唆されており，少女Oはしばしば高熱を出す重症の結核患者であった。C夫人は，Oの病状を気遣かったり，伊人の風邪が悪化したとき薬を持ってきたり入院の世話をしたりするが，そこには，実際のコルバン夫人の療養者に対する手厚い看護の実態の一端が書き留められていると考えてよかろう。

コルバン夫人の伝道の対象は，療養者だけではなかった。八幡海岸には，当時，第一高等学校・早稲田大学・東京高等師範などの夏季寮があって，大勢の学生が居住しており，彼らの中にも，コルバン夫人の宣教活動に積極的に参加したり，入信したりする者が少なくなかった。

『南遷』の登場人物を見ると，伊人は東京帝国大学，Oは上野の音楽学校，Bは東京高等商業学校の学生で，神学校入学準備中のK[*17]も，二人の女学生も，校名は明かされていないがやはり学生である。季節は晩冬から初春であるため，夏季寮の学生という設定を想定することは無理があるが，夏冬を通して多くの学生が保養のため滞在し，コルバン夫人との間に盛んな交流があった館山の地の雰囲気をそこはかとなく伝えている。

その他，「コルバン夫人は日曜ごとに，自転車にのって，北条の町にある教会に行く」，「日曜日にはコルバンホームの人たち数人が積極的に礼拝に参加された」といった証言もあるが，いずれも生活描写の一齣として，『南遷』の中に描かれている。

以上，『南遷』のC夫人がコルバン夫人をモデルとしていることを，『南遷』の描写とコルバン夫人に関する回顧的文章の記述をもとに検証してきた。次に，C夫人の友人で，伊人にC夫人を紹介したE某について，現時点での調査結果から得られた推測を記しておきたい。

E某の人物像を要約すると，およそ次のようになる。50歳前後の西洋人宣教師で，アイルランド美人を母親に持ち，東洋人の血が混じっている。頭頂がはげていて，鷲鼻に深くほれこんだ眼，5尺5寸の体。C夫人とは親しい関係にあり，房州の彼女の家も何度も訪れたことがある。上野で伊人と会っていることから，おそらく東京在住である。

1920年頃日本にいたイギリス人宣教師で，Eの頭文字で始まる名前，生年が1870年前後という条件を満たす人物を調べる[*18]と，最も合致する者として，エルウィン（William Hedger Elwin）宣教師が浮かんできた。

エルウィンは，英国籍，1869年生まれであるから当時51歳，日本における活動は1907年から1924年で，1950年に死去している。所属する伝道団体が，コルバン夫人と同じCMS（英国聖公会宣教協会）であること，監督管区が東京であることは，『南遷』のE宣教師のモデルである可能性を一層強くするものと考えられる。さらに『大正九年　日本聖公会要覧』[*19]によれば，「本邦内ニ在住スル日本聖公会ニ連接スル他ノ聖公会ノ聖職」欄に，「ダブルユ，エチ，エルウイン」の名が見え，住所が「東京市小石川区指ヶ谷町七」となっている。東京帝国大学や第一高等学校にほど近いこの住所は，

小説中の伊人の住まい，及び作者郁達夫の下宿先[*20]とも近距離にある。また，エルウィンと住所を同じくする聖職者に，もう一人「兪顯庭」という人物が載っているが，名前から推測すると，中国人である可能性が高い。すると，ここからエルウィンと中国人との関係性が浮かび上がってくる。

エルウィン宣教師とコルバン夫人を結ぶ共通項をもう一つ挙げておく。エルウィンが日本聖公会と密接な関係を持つ聖職者であることは，前述の資料に明記されているが，コルバン夫人が館山で支援していた北条教会も，日本聖公会に所属する教会である。エルウィンとコルバン夫人，或いは，エルウィンと北条教会の接点を示す確たる証拠はないが，教派の共通性を考慮すれば，二人が知己であったと想定することは，必ずしも荒唐無稽なことではないといえよう。

このように見てくると，たとえ，郁達夫自身はコルバン夫人やエルウィン宣教師と面識がなかったとしても，中国人社会の情報網，あるいは東京帝大・一高の交友関係を通じて，彼らの存在や活動内容，人となりを知っていたことは充分考えられる。ただし，『南遷』のE某が実在のエルウィン宣教師であるかどうかは，現時点では断定できない。あくまでも，モデルであった可能性が高い人物として，指摘するにとどめる。

3．北条教会

『南遷』の第6，7章には，北条の教会での様子が描かれている。場面によって，「北条市内の礼拝堂」「北条市内の教会」「北条市の小さな教会」などと異なる表現がなされているが，伊人たち療養中の数人の学生はそろって，日曜日の朝の礼拝と夕方の祈禱会に参加している。この祈禱会において，伊人は，聖書の一節を引きながら自分の思想を表明しているが，作者郁達夫が「自序」[*21]の中で，「主人公の思想はその演説の中に見てとることができる」と述べているように，重要な場面の舞台となっているのが，この教会である。教会の場所は，小説の記述に従えば，駅前からにぎやかな通りをまっすぐ歩いたところにある。

1920年当時，北条にあった教会で，コルバン夫人とも関係の深い教会といえば，北条六軒町1761番地にあった「安房第二基督教会」である。位置的にも，小説の記述と一致する。

まず，この「安房第二基督教会」の歴史を，簡単に記しておく[*22]。

明治30年頃，笛木角太郎師が聖書販売のためこの地を訪れ，伝道の必要を感じて，定住して専心伝道に従事することになり，やがて北条町北町に日本聖公会北条基督教講義所（安房北条教会）を設立した。37年には，新塩場に移転。1911年(明治44)，北条六軒町1761番地に移って，教会堂・牧師館を新築，名称を「安房第二基督教会」とした[*23]。教会の成立は，この時点である。このころ，熱心な活動の結果，一時信者は百名に達した。また，コルバン医師夫妻が来住し，近在の病人のために奉仕したのも，このころである。1923年（大正12)，関東大震災で会堂が壊滅したため，新塩場に教会堂と牧師館が新築され，名称も「館山聖アンデレ教会」と改められた。

現在，館山市北条新塩場1677にある「館山聖アンデレ教会」が，この教会である。教会内には保育園が附設されているが，これは，1949年に教会内に開設されたユネスコ保育園が，1954年に教会経営となって，聖アンデレ保育園と呼称されるようになったものである。1923年の建築後，増築や改装が行われているが，今でも本来の建物の姿を基本的にはとどめている。『南遷』に描かれた関東大震災前の教会とは，もちろん場所も建物も同じではないが，建築時期がわずか12年しか隔たっていないことを考えると，現在の教会の佇まいから，『南遷』当時の教会の様子をある程度想像することはできよう。

さて，小説には，この教会の牧師が登場する。前述のC夫人やE某のように名前の手がかりとなるような頭文字は示されていないが，30歳位，小柄で頬髭をたくわえており，メタルフレームの眼鏡をかけ，沈鬱な声で話す牧師である。初対面の伊人は，この牧師と話してみて，「落ち着きのある寡黙な好人物」と感じている。

このころ実際の「安房第二基督教会」で任に当たっていたのは，深井渙二伝道師である。在職年限は，1918年（大正7）11月28日～1921年（大正10）3月。深井渙二師は，1885年生まれであるから，当時35歳であった。風貌については言及されたものがないが，学者肌で，哲学書や神学書を原書で読んでいて，独身であったという[*24]。牧師と伝道師という違いはあるが，年齢的にも近く，小説に描かれた牧師の印象と深井渙二師の「学者肌」という評語に一脈通じるものがあるようにも思われる。

4．『南遷』と郁達夫とキリスト教

『南遷』は，小説全体を通して，きわめてキリスト教の色彩が濃厚な作品である。聖職者であるコルバン夫人・E宣教師・北条教会の牧師はいうまでもないが，主人公伊人をはじめとして，狂信的な信者Kのほか，主要登場人物は皆キリスト教徒という設定である。(Bはキリスト教徒ではないが，何か信仰を持ちたいと思っている。)そして，静養の傍ら，聖書を読み，賛美歌を歌い，お祈りをする，という敬虔な信者そのものの生活が描かれている。

郁達夫の作品におけるキリスト教にまつわる表現に関しては，すでに井上薫氏によって詳しい考察[*25]がなされている。井上氏は，『過去』『迷羊』『遅桂花』に見られる「性」の「告白」の方法に着目して，「生涯を通

じてキリスト教信者とはならなかった郁達夫が，『神』不在の下，性の言説化においてのみ借用したキリスト教的『告白』の儀式」であると指摘している。キリスト教は小説の方法としてのみ採り入れられている，とする見解であるが，では，「南遷」におけるキリスト教はいかなる意味を持つものであろうか。

『南遷』の中で，キリスト教的表現として最も顕著なものが，聖書が引用された二個所である。

一個所目は，夜の砂浜で，伊人が昼間Oと歩いたときの二人の足跡を見つけ，胸が高鳴ったとき，ふと，聖書の二節の言葉が浮かんでくる場面である。

> されど我は汝らに告ぐ，すべて色情を懐きて女を見るものは，既に心のうち姦淫したるなり。もし右の目なんぢを躓かせば，抉り出して棄てよ。五体の一つ亡びて，全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。（マタイによる福音書　第5章28-29節）*26

キリスト教の重大な罪過の一つである姦淫を戒めるこの二節を思い出すと，伊人の心の中に再び葛藤が生じる。それは，霊と肉の衝突，すなわち，性的欲求とキリスト教的禁欲主義との葛藤である。既に指摘されているように，『南遷』では霊と肉の関係が二重構造になっていて，伊人とO，伊人と東京の若い淫婦Mとの関係が，それぞれ霊と肉の関係として描かれていて，同時にOに対しても，伊人は精神的愛と性の衝動とに苦しむ*27。この点と関連していえば，伊人とBとの対話の中で，アナトール・フランスの『タイス』*28が話題に上るが，一人の聖僧がある女優を救わんとして身を滅ぼしていく魂の軌跡を辿ったこの小説は，まさに霊と肉の衝突を描いたものである。また，苛酷な苦行を自らに課しているKの生活態度は，キリスト教的禁欲主義の極端な例といえよう。

しかし，このようなキリスト教の倫理観から発した霊と肉の衝突，すなわち「性の苦悶」の表現は，既に前作の『沈淪』に見られるものである。

もう一個所，聖書が引用されるのは，北条の教会における夜の祈禱会で，伊人が行った演説の中である。伊人は，「幸福なるかな，心の貧しき者。天国はその人のものなり。」（マタイによる福音書　第5章3節）を引き，山上の説教における大綱はこの言葉に尽くされているとして，「物質上の貧苦」と「精神上の貧苦（不満足）」について彼の解釈を開陳する。その解釈は，概ね一般的なものであるが，「精神上の貧苦」，すなわち精神的に満ち足りていない人の例として挙げた，「純潔な心を持っていながら，社会の因習や国民の習慣，国際的な偏見のせいでキリストの愛を全うすることができない人」と「肉体に病気があるために，神の意志やキリストの愛を知っていても，どうしても行うことができない人」というのは，幾分独特な解釈であると思われる。とりわけ，後者に属する人間として，現在の社会にも満足できず，未来に対しても希望のもてない「世紀末の病弱な理想家たち」を挙げているが，これは明らかに伊人本人であり，また作者郁達夫が『南遷』で描いたという「無為の理想主義者」*29を指すものであろう。つまり，聖書の言葉を利用しながら，「無為の理想主義者」の「生の苦悶」を語っているのである。

この演説の後，Bが，伊人の清貧を尊ぶという主張に対して激しく反論してくる。伊人の主張は混乱状態の中国には適用できるかもしれないが，日本の経済社会には合わないものだ，伊人の話は無政府主義や社会主義を扇動するようなものだ，というのである。Bの反論の背景には，単に思想の違いだけではなく，明らかに半植民地と化した弱小国中国に対する蔑視がある。Bの話を聞いていたKも，Bの意見に賛成して，一層あおり立てる。Kは，その日の朝の礼拝で，外国語を学んだり女性信者とつき合いたいから信仰しているようでは東洋人はだめだ，と暗に伊人を非難する説教を行ったばかりであった。伊人が，KとBの民族的偏見に根ざす無理解と悪意に傷つく，という「弱小民族の悲哀」もまた，『沈淪』の主題の一つであった。

このように見てくると，『南遷』における聖書は，あるいは宗教的素材は，「性の苦悶」「生の苦悶」「弱小民族の悲哀」という，『沈淪』にも描かれていた主題の顕在化のための小道具としての作用しか果たしていないといえよう。

ところで，郁達夫とキリスト教との関わりは，1912～13年に杭州で学んだ2校のミッション・スクール時代に始まる。最初のアメリカ長老会系の之江大学預科では，「毎朝，起床すると祈禱，食事の後もまた祈禱。平日は9時から10時までが最も重要な儀式で，終わるとまた祈禱。『聖書』は，各学年必修の重要課目である。日曜日の午前は，重病人か動けない者以外は，全員半日の礼拝を行わなければならない。礼拝が終わると，もちろんまた祈禱，そして『聖書』の拝読」*30という宗教色の濃い厳格な管理教育であったらしい。次に入学したアメリカ浸礼会系の蕙蘭中学でも，その学校教育に失望して，3ヶ月で退学している。そもそも英語学習を目的としていた郁達夫にとって，規律の厳しいミッション・スクールでの宗教体験は，キリスト教への信仰心を芽生えさせるどころか，かえって反発を感じさせたようである。しかし，このときの聖書の勉強や宗教儀式の体験は，彼のその後の西洋文学や近代思想の理解に，知識の次元において大いに役立ったと思われる。『南遷』におけるキリスト教に関する描写も，またその顕著な一例といえよう。

5．おわりに

館山を舞台とする『南遷』の描写と，当時の場所や建物，人物との検証を通して，自己の体験に取材した自伝的作品が多い郁達夫の小説の中で，『南遷』もまた，

その描写の多くが事実に基づいていることを確認することができた。

主人公伊人の経歴や性格も，留学時代に書かれた他の小説同様，作者郁達夫を彷彿とさせる人物である。ただし，伊人がキリスト教徒であることが，郁達夫とは異なる点であり，『南遷』における一種の虚構であるといえよう*31。このような虚構や，聖書の句に仮託して自らの考えを吐露するという手法は，療養や保養で多くの学生や知識人が集い，そこでキリスト教伝道師との盛んな交流がもたれていたという，館山の風土的現実によって生み出されたものといえよう。

注

1　1921年7月27日作。『沈淪』（泰東図書局，1921年10月15日）に収録されている。小稿では，『沈淪』（泰東図書局，1928年9月20日10版）をテキストとし，『郁達夫全集（第1巻）』（浙江文芸出版社，1992年）を合わせて参照する。

2　曾華鵬・范伯群『郁達夫評伝』（百花文芸出版社，1983年）。ここでは，郭文友『千秋飲恨—郁達夫年譜長編』（四川人民出版社，1996年）364-367頁による。

3　解志熙「伊人何病？」（温儒敏主編『郁達夫名作欣賞』中国和平出版社，1998年）81-88頁。

4　張均『郁達夫的文学道路』（福建教育出版社，1997年）35頁。

5　たとえば，伊藤虎丸他編『郁達夫資料総目録附年譜（下）』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会，1990年）221頁。注2前掲書『千秋飲恨—郁達夫年譜長編』319頁。

6　周芃文・于听編訂『郁達夫詩詞抄』（浙江人民出版社，1981年）99・101頁。

7　館山市に関しては，次の2冊の文献を参照した。

君塚文雄編『ふるさとの想い出　写真集　明治・大正・昭和館山』（国書刊行会，昭和56年）

館山市史編纂委員会『館山市史』（国書刊行会，昭和56年）

8　館山市の歴史について，千葉県館山市企画部に照会したところ，合併推進室より詳細な御回答をいただいた。参考までに，以下に概要を記す。

館山市は，明治22年3月31日に，町村制が施行され，新たな町村の編成が以下の通りなされた。〔2町9村〕船形村・凪原村・北条町・館山町・西岬村・神戸村・富崎村・豊房村・館野村・九重村・豊津村。／明治26年1月27日に，凪原村が町制を施行し，那古町となる。／明治30年12月1日に，船形村が町制を施行し，船形町となる。／大正3年4月1日に，館山町と豊津村が合併して，館山町となる。従って，大正9年頃は，〔4町6村〕船形町・那古町・北条町・館山町・西岬村・神戸村・富崎村・豊房村・館野村・九重村。続いて，昭和8年4月18日に，館山町と北条町が合併して，館山北条町となる。／昭和14年11月3日に，館山北条町，那古町及び船形町の3町が合併して市政を施行し，館山市となる。／昭和29年5月3日に，西岬・神戸・富崎・豊房・館野・九重の6ヶ村が，館山市に合併して，現在の館山市となる。

9　現在，医療法人博正会北条病院の外来の建物は昭和49年建築当時のものであるが，病棟の建物は数年前に建て替えられている。

10　医療伝道とは，後述するように，病人に医療を施しながら，キリスト教を伝道すること。

11　粕谷常吉編『房州に光を掲げた人々〔改訂増補〕—房州伝道百年小史—正・続編』（聖公会出版・事業部，1989年）。以下，コルバン夫人の事跡に関する記述は，基本的に同書によっている。

12　同上書，20頁。同書92頁の西崎治男氏，及び121頁松本正雄氏の文章では1863年となっているが，ここでは，英国留学中CMS（英国聖公会宣教協会）の本部で資料を丹念に調べた渡辺政直氏の説を採る。

13　「石川啄木の遺族につながる少年の日の思い出」（ここでは，注11前掲書，48頁による）

14　結核療養に適した場所として，ヨーロッパでは，まず郊外の清澄な空気を求めるところから始まり，次に温泉地への転地が流行し，その後海浜リゾート，そして山岳或いは高原が注目された。日本の海浜における結核サナトリウムは，湘南海岸や神戸須磨に多かった（福田眞人『結核という文化』中公新書，2001年）が，館山もまた「風光明媚」「空気が清浄」「人里離れて静か」という条件に合致していたため，結核療養地となっていたのであろう。

15　日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたち：日本聖公会人物史』（日本聖公会出版事業部，1974年，293-294頁）によれば，「養生院」は元々八幡海岸にあった結核で悩む人のための粗末な施設であり，コルバン夫人は北条に来ると，早速この施設を訪ねて患者を見舞うとともに，熱心な伝道活動を行ったのだという。「コルバンホーム」と呼ばれた施設が，コルバン夫人が建てたものなのか，既設の建物なのか，それとも，「養生院」と「コルバンホーム」は別物なのか，今は不詳のまま，『房州に光を掲げた人々〔改訂増補〕』の記述に従っておく。

16　因みに，コルバン夫人が世話をした療養者の中に，石川啄木の未亡人石川節子がいる。明治45年5月，胸を病み，妊娠8ヶ月の節子未亡人は7歳の長女を連れ，八幡にやって来た。コルバン邸近くの下宿に静養し，コルバン夫人が牛乳やスープ，部屋代・医薬費を恵み，6月には次女房江を出産した。房州で生まれたので，房江と命名されたのである。（利田正男『新版館山市文学散歩』BOOKS松田屋，昭和47年，34-35頁）

17　石川金治「館山宣教の回想」（注11前掲書，308頁）に，『南遷』と同じ頃の記憶として，「当時の神学生揖虎太郎氏の熱弁には動かされるところが多かった」と記されている。「揖」という苗字は「かじ」とも読み，「かじ」はアルファベットで表すと頭文字がKとなる。偶然の一致であるかもしれないが，常軌を逸したほどの熱心な信者Kのモデルが，この「揖虎太郎」ではないか，という推測も可能である。いずれにしろ，今はもう確かめるすべはないが，アルファベットで表された小説中の人物には，特定のモデルがあった可能性はあると思われる。

18　日本聖公会歴史編集委員会『日本聖公会教役者名簿』（日本聖公会管区事務所，1981年）90頁。

19　『大正九年　日本聖公会要覧』（日本聖公会教務院總務局，1920年）188頁。

20　注5前掲書『郁達夫資料総目録附年譜（下）』によれば，本郷区東片町135番地，後に池之端に転居しているが，いずれも東京帝大の近辺である。

21　注1前掲書『沈淪』（泰東図書局，1928年9月20日10版）1頁。

22　粕谷常吉「館山聖アンデレ教会略史」（注11前掲書，328-335頁），日本聖公会横浜教区百年史刊行委員会編『あかしの大路—百年のあゆみに学ぶ—』（日本聖公会横浜教区百年史刊行委員会，1984年，186-187頁）参照。

23　教会の場所について，石川金治「館山宣教の回想」（注11前掲書，305頁）は，「諸隈医院の隣り浅井写真館のすぐ向かい」と記している。

24　注11前掲書，306頁，332頁。注18前掲書，43頁。

25　井上薫「郁達夫作品にみる『性（sexuality）』の言説―その『告白』という儀式―」（『野草』第69号，2002年）

26　引用文の原文は英語である。引用された英語訳聖書は，おそらく1611年に発行された『欽定訳聖書』（*Authorized Version of the Bible,* 米国では *King James Version* と呼ばれる）によっていると思われる。*THE HOLY BIBLE CONTAINING THE OLD AND NEW TESTAMENTS* (New York: AMERICAN BIBLE SOCIETY, 1972), p.4 を参照。なお，小稿中の日本語訳は，当時の日本人信者が使用していた文語訳聖書を尊重するために，『新約聖書　詩篇附　文語訳』（日本聖書協会，2000年）によっている。

27　注３前掲書。

28　アナトオル・フランス原作，水野和一訳『タイス』（警醒社書店，大正４年），参照。

29　注21に同じ。

30　郁達夫「孤独者―自伝之六」（『人間世』第23期，1935年３月５日），ここでは，『郁達夫全集（第４巻）』（浙江文芸出版社，1992年）による。

31　『南遷』から約10年後，1932年に書いた小説『遅桂花』に，郁達夫は『南遷』の主人公伊人のモデルとなった人物を登場させている。作者とおぼしき主人公であり語り手である郁先生の友人としてである。もちろん，その設定自体が創作ではあるのだが，『南遷』の伊人を作者と重ねていた読者にとっては，意外の感を抱かせるものである。

付記

キリスト教に関して，本学助教授黒川知文先生より，種々の御教示や多くの文献資料をいただきました。また，館山聖アンデレ教会司祭河崎望師には，筆者の取材に応じていただき，礼拝堂の案内や御教示をいただきました。記して心より感謝申し上げます。

（平成14年９月９日受理）



写真①　安房北条駅前（大正８年開通当時。正面が安房北条駅）



写真②　海岸から鷹ノ島（左）と沖ノ島（右）を望む

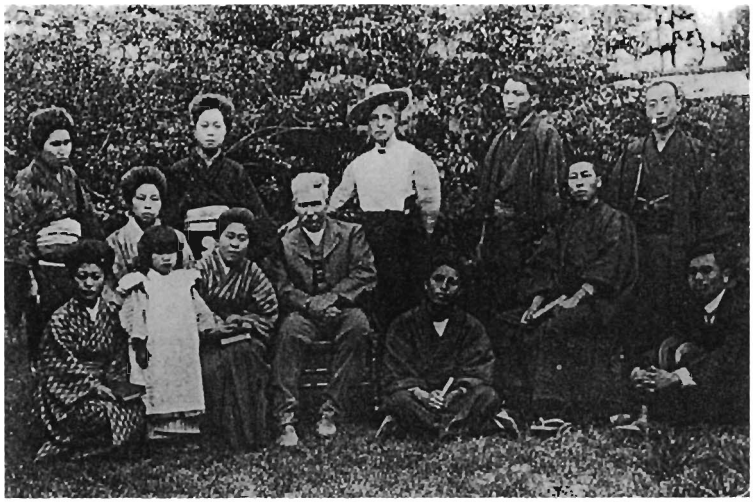


北条館山市街図（大正11年８月発行）

出典：北条館山市街図・写真①③⑤
『ふるさとの想い出　写真集　明治・大正・昭和　館山』
（国書刊行会，昭和56年）



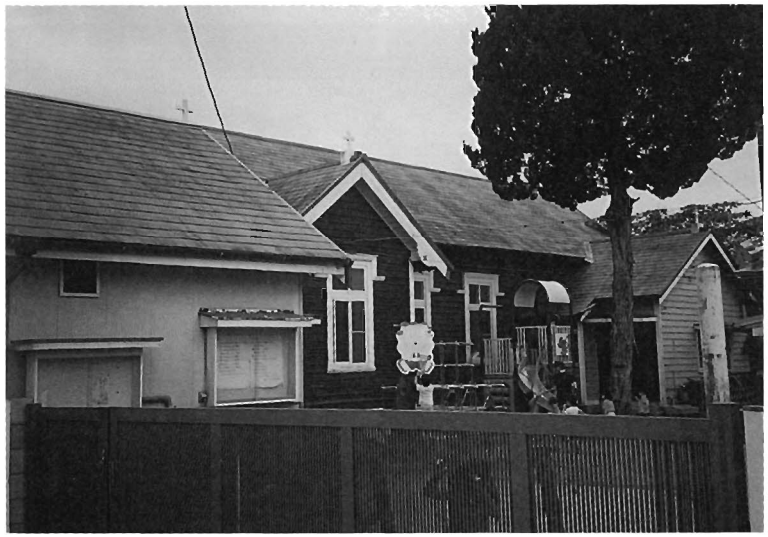
写真③　北条病院
（明治44年建築，関東大震災にも倒壊を免れた）



写真⑤　八幡海岸のコルバン邸庭先で
（明治45年。後列中央がコルバン夫人，
前列中央の椅子の人がコルバン医師）



写真④
昔の海岸の面影を残す松林



写真⑥　現在の館山聖アンデレ教会